国際交流基金日本語教育紀要
第18号（2022年）
〔報告〕

インドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者を対象とする反転授業によるオンライン日本語研修の実践

－EPA に基づく訪日前研修の新たな取り組み－

大田美紀・早川直子・小川靖子・江森悦子
牟田綾・平田佑和・竹本恭子・竹田恒太

1. はじめに

日本とインドネシア（以下、尼）・フィリピン（以下、比）各国との間に結ばれた経済連携協定（以下、EPA）により、尼は2008年、比は2009年から看護師・介護福祉士候補者（以下、候補者）の日本への受け入れが開始され、2019年までに尼人候補者約2700名、比人候補者約2500名が来日している（厚生労働省：2019）。国際交流基金（The Japan Foundation、以下、JF）が受託し実施した候補者に対する日本語研修（以下、訪日前研修）の概要は、登里他（2014）で報告されているが、近年では求人数の増加にともない、尼・比ともに約300名程度の大規模な研修が行われている。

しかしながら、2019年度（令和元年度）に実施した尼13期、比12期候補者に対する訪日前研修は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、対面での研修実施が困難となり研修半ばで中断となった。このようなコロナ禍の不確定な状況に対応するため、2020年度（令和２年度）の尼14期、比13期候補者に対する訪日前研修は、オンラインで実施可能な研修として、コースデザインを見直し実施することとした。

対面研修からオンライン研修への変更にともない、研修目標は従来通りとしたが、授業形態は反転授業[1]を採用し、主教材を『みんなの日本語』から『まるごと　日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）へ変更した。また、反転授業、『まるごと』への教材変更に併せ、研修カリキュラムを構築し直した。

本稿では、2021年２月から８月にかけて行われた尼14期、比13期候補者に対するオンライン研修の概要とカリキュラム再構築における留意点を述べるとともに、本研修の成果と課題を述べる。なお、報告者は JF の派遣専門家であり、本研修においては教務担当者として携わった。

2. 研修の背景

2.1　訪日前研修

図１はEPAに基づき訪日を希望する外国人看護師・介護福祉士が参加する国家試験合格までの長期プログラムの流れを示したものである。JFが実施する訪日前研修はこのプログラムのスタートを切る役割を担っている。プログラムの参加者は母国においてすでに看護や介護の専門知識を身につけ、中には実務経験を有する者もいる。しかしながら、日本の「看護師」「介護福祉士」国家資格を取得していないため、「看護師候補者」「介護福祉士候補者」と呼ばれる。図１の通り、候補者は半年にわたる訪日前研修の後、日本でさらに半年の訪日後研修に参加する。そして、約１年の研修終了後は日本各地の受け入れ先で働きながら国家試験合格を目指していく。

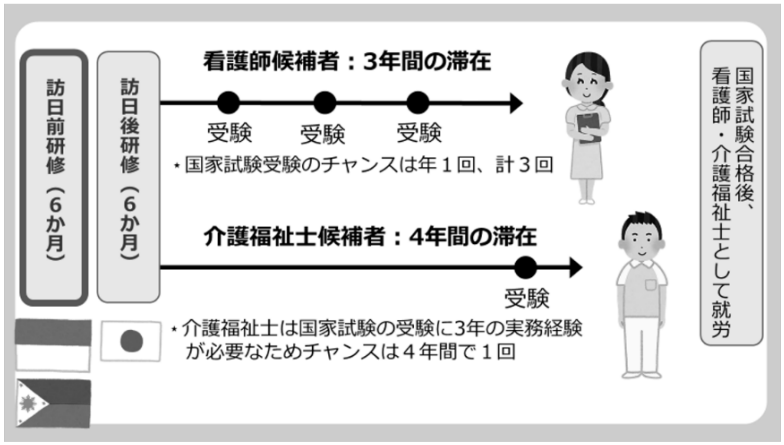

図１[(2)]　EPAに基づく候補者受け入れプログラムの流れ

JFが実施する訪日前研修は、尼４期、比３期研修より開始され現在に至る。研修は全日制、全寮制であり、候補者は研修所の敷地内もしくは近隣の建物で寮生活を送りながら日本語学習に励む。訪日前研修開始当初、各国100人程度であった候補者数は求人数の増加にともない300名を上回り、研修の規模は拡大している。2020年度（令和２年度）研修はオンライン形態への変更を余儀なくされたが、研修の目的およびJFがEPAプログラムの導入部を担うことはこれまで通りである。

2.2　研修の目的と目標

訪日前研修の目的は訪日後の日本での生活と国内研修に必要な日本語能力と、日本社会・文化への理解を促すための知識を身につけることである。これら２つの目的を実現するため、研修の３本柱として表１の「日本語」「自律学習」「社会文化理解」の３つの目標を掲げている。

訪日前研修では、「日本語」では一般的な日本語能力と看護・介護に関わる基本的な語彙や表現を習得すること、「自律学習」では国家試験合格に向け計画的に学習する習慣をつけること、そして「社会文化理解」では現地にいながらもよりリアルな日本の社会・文化、日本の看護・介護事情に触れ、理解を深めることが目標とされている。

表１　訪日前研修の目標

日本語	①日本での生活と訪日後研修での学習に必要な、基本的な日本語の知識と運用能力を習得する。言語知識・読解・聴解においては未習者の場合、初級後期修了程度（日本語能力試験N4 程度）を目標とする。また、日本での生活と訪日後研修に必要なコミュニケーション能力を含め、４技能をバランスよく身につけることを目指す。 ②看護・介護に関わる基本的な語彙・表現を身につける。
自律学習	③基本的な予習・復習のやり方と、自己学習の習慣を身につける。 ④自分の学習を計画し、振り返る姿勢を養う。
社会文化理解	⑤日本と日本人に関する基本的な知識（地理・交通等）を理解する。 ⑥日本で生活するのに必要な、基本的な生活習慣やマナーを理解する。 ⑦日本の職場習慣や看護・介護の業務場面における文化・習慣の違いを理解する。

2.3　研修のカリキュラム

訪日前研修は学習総時間820時間以上の約６か月にわたる研修である。「日本語」は、文字学習および４技能をバランスよく身につける総合日本語の授業に加え、看護・介護の基本的な語彙・表現を学ぶ専門日本語の授業を行う。さらに「自律学習」と「社会文化理解」についても、形態の変更はあるものの例年とほぼ同じ内容で実施できると見込まれた。これらカリキュラムの詳細は登里他（2014）を参照されたい。

本報告では「日本語」と「自律学習」について限定して述べることとし、次章以降では、全日制、全寮制の大規模研修がオンライン化することによりそれらがどのように実施されたかを報告する。なお、本研修では開講時に学習歴のある者を集め既習クラスを編成するが、本報告では多数を占める未習クラスについて述べる。

3.　オンライン研修のデザイン

3.1　オンライン化による変更点

研修がオンライン化しても、これまでと同様に候補者が身につける日本語の目標レベルは変わらない。日本語未習者は研修終了時までに初級修了（日本語能力試験 N4 程度）の日本語力、つまり、日本での生活と訪日後研修での学習に必要な、基本的な日本語の知識と運用能力を備えることが求められる。

こうした目標を踏まえ、2020年度の研修実施にあたっては、コロナ禍における様々な状況を想定した上でオンラインを導入した研修形態を探った。当初は一部、対面研修の可能性も残しながら、柔軟な対応ができるように研修体制を検討し、最終的には主教材、授業形態の変更に至った。本章からは、オンライン化による変更点について「研修形態」「学習環境整備」「コースデザイン」「テスト・評価」の４つの観点から述べていく。

3.2　研修形態

ここでは、オンライン研修による研修形態の枠組みと、研修運営に関わる講師や教務担当者の動きについて述べる。これまでの対面研修では１クラス20名程度、１日７コマ（１コマ50分）の授業を行っていたが、2020年度の訪日前研修ではオンライン形態の導入（同期の授業はZoomを使用）に伴い、研修形態の大幅な見直しを行った。まずは、オンライン上でも講師が円滑に授業を進められる１クラスあたりの候補者数を想定した。さらに、候補者側の集中力、およびネット接続が維持できる時間を考慮した。

その結果、研修の総時間数を同期学習と非同期学習の２つの学習形態に分けて設定することとした。まず、１クラス（20名弱）を午前と午後の２つのグループに分け、１日７コマのうち午前、または午後の４コマをZoomに接続して同期でのライブ授業や、自律学習の時間とした。同期ライブ授業を受けるグループは固定するが、授業を受ける時間帯は入れ替えし、午前午後のどちらかの時間帯に偏らないようにした。なお、同期の自律学習は、個別面談や、候補者同士で学習方法を共有するなどのグループ活動を行っていた。

Zoomを利用し、同期のライブ授業を受ける候補者数を対面時の半数の10名以下に絞ることで、オンラインで行う語学授業の質を担保するとともに、仮に研修の途中から対面研修が可能になった場合でも教室の収容人数を抑え、密を避ける対策が講じられると考えた。

一方、非同期学習の時間については、候補者が自律的に学習を進めていくことが必要となり、そのために、どのような教材リソースや仕掛けによって、候補者を学習に向かわせるかという点が課題となった。そこで、反転授業の考えを取り入れ、非同期の時間帯はライブ授業のための予習時間とし、日本語学習プラットフォーム「JF にほんご e ラーニング　みなと（https://minato-jf.jp）」（以下、「みなと」）を活用して学習を進めることとした。講師は、候補者の「みなと」での学習進捗状況を追い、遅れが目立つ候補者には個別に指導を行うこととした。また、ソーシャルラーニングシステムであるEdmodoを導入し、課題の提示や提出など、講師と候補者、あるいは候補者間のやり取りに活用し、非同期の時間も１人で学習を進められる仕組みを考えた（表２　研修形態を参照）。

表２　研修形態

<table>
<tr><th></th><th>時限</th><th colspan="2">A クラス午後グループ</th><th colspan="2">A クラス午前グループ</th></tr>
<tr><td rowspan="4">午前</td><td>1</td><td rowspan="3">非同期学習</td><td rowspan="3">自律学習（予習）
「みなと」での学習</td><td rowspan="3">同期学習
ライブ授業</td><td>漢字</td></tr>
<tr><td>2</td><td rowspan="2">総合日本語、他</td></tr>
<tr><td>3</td></tr>
<tr><td>4</td><td>同期学習</td><td>自律学習</td><td>同期学習</td><td>自律学習</td></tr>
<tr><td rowspan="3">午後</td><td>5</td><td rowspan="3">同期学習
ライブ授業</td><td>漢字</td><td rowspan="3">非同期学習</td><td rowspan="3">自律学習（予習）
「みなと」での学習</td></tr>
<tr><td>6</td><td rowspan="2">総合日本語、他</td></tr>
<tr><td>7</td></tr>
</table>

※総合日本語には、『まるごと』を使った授業のほか、「言語知識」科目も含む。
※漢字には、『まるごと』の漢字語彙のほか、「漢字プラス」科目も含む。

研修運営体制では、教務担当者を含めた運営チームは一部を除き、現地に赴任したが、当時のコロナ感染状況に鑑み、日本人講師[(3)]の現地渡航は難しいと判断された。したがって、日本人講師（尼：30名、比：19名）は全員が日本の各居住地からオンラインで授業を行うこととなった。日本人講師と現地講師、教務担当者を含めた運営スタッフと講師の連絡、作業用コミュニケーションツールとして Microsoft の Teams を活用し、講師間での即時的で密なコミュニケーションが取れる体制を整えた（表 3　運営スタッフを参照）。

オンライン化にともない、候補者も研修開始時より各居住地からオンラインで研修を受講することとなった。候補者には日当が支給され、仕事をしなくても研修に集中できる状態であった。開講時オリエンテーションでは、300名近くの候補者が一斉に遠隔地より Zoom に参加し、ルールの周知とともに、オンライン研修における学習の流れや使用する教材などの学習オリエンテーションが行われた。

表 3　運営スタッフ

運営側の概要	尼（人数）	比（人数）	業務地
日本人講師	30名	19名	日本
現地講師	18名	16名	現地
教務担当者／調整員	4 名／ 4 名 計 8 名	4 名／ 4 名 計 8 名	現地、日本
現地スタッフ	3 名	2 名	現地

※比の現地講師16名中 8 名は外部委託先に所属する講師である。

表 4　候補者（研修終了時）

参加者	尼	比
人数	看護　8名 介護　262名 計　270名	看護　10名 介護　204名 計　214名
平均年齢	看護　29.0歳 介護　23.5歳	看護　30.5歳 介護　31.4歳
クラス数	16クラス	14クラス

※人数は既習クラス候補者も含む。
※比のクラス数14クラスのうち 4 クラスは外部委託先に設定されたクラスである。

このような運営体制のもと、2020年度研修は以下の半年の期間、日本と尼、比の現地に分かれ、オンラインによる大規模な遠隔による訪日前研修を実施する運びとなった。

尼研修期間：2021年 2 月 8 日～ 7 月30日

比研修期間：2021年 3 月 3 日～ 8 月26日

なお、例年は尼、比とも11月上旬から 5 月下旬に研修が行われているが、2020年度はコロナ禍により開始時期が遅れた。

3.3　学習環境の整備

オンライン研修を円滑に実施する上で必須となるのは、インターネット接続を含めた学習環境の整備である。尼、比とも都市部周辺であってもネット環境が安定しているとは言えず、候補者の居住地が地方や離島にある状況ではなおさら不安定であることが想定された。研修開始前、候補者には研修への参加条件として Zoom での受講が可能なネット環境を整えることについて現地の関係機関を通して申し伝え、運営側からは候補者に対し、十分な通信費の補助を行っ

た。しかしながら、地方ではネット接続の状況は改善できず、やむなく辞退する候補者や、より安定したネット環境を求めて居住地を変える候補者もいた。

また、教材、補助教材類については、現物を各候補者の居住地に送付するとともに、一律に学習用タブレットを貸与した。このように、運営側ではオンライン学習に必要な環境を整えた。

3.4　コースデザイン

2020年度の訪日前研修は、研修形態を大きく変更することとなったため、まず、研修の要となる「総合日本語」の主教材を見直し、これまでの『みんなの日本語１、2』から、JF が開発した日本語教材、『まるごと』「かつどう」「りかい」に変更した。その理由として、『まるごと』はオンラインで学習できるリソースが充実し、反転授業に適していることが挙げられる。前述した通り、JF が開発した e ラーニングによる日本語学習プラットフォームである「みなと」では、コースブック『まるごと』の内容が自習できる「まるごと日本語オンラインコース」（以下、「まるごとコース」）が開講されている。候補者は、授業の前に「まるごとコース」で音声を聞いて会話を確認したり、ことばの意味や文法を調べることができる。このように『まるごと』を通して同期と非同期の時間がつながることで学習効果が見込めると考えた。

一方、『まるごと』は、コミュニケーション重視のトピックシラバスで構成されているため、これまでの訪日前研修で使用してきた『みんなの日本語１、2』よりも、文型や文字語彙数が少ない。そこで、初級文法を扱う「言語知識」、初級漢字を扱う「漢字プラス」といった科目を同期授業に加え、主教材である『まるごと』では扱わない学習項目を補強することとした。補強のための科目を設定したのは、EPA の候補者は、日本での国家資格取得を目指して長期的に日本語学習を継続するため、コミュニケーションを重視した日本語だけではなく、その基礎となる言語知識をしっかり定着させていく必要があるからである。また、「言語知識」と「漢字プラス」は、あくまでも主教材『まるごと』を補強するものという位置づけであったため、今回の研修では評価対象には含めなかった。このように研修のオンライン化に当たっては、オンラインで学習できるリソースを活用し、『まるごと』を軸にしたコースデザインを行うことで、従来の「総合日本語」の目標設定を変えずに研修が行えるようにした。

本研修では未習クラス候補者の学習段階を「入門、初級前期、初級後期」の３段階に分けた。表５は訪日前研修における未習クラス候補者の学習段階とそれぞれの段階で用いた『まるごと』の該当課を示したものである。各段階は約６週間で進め、入門段階から学習を開始した未習クラス候補者は初級後期までを学習する。

表５　学習段階と『まるごと』該当課

学習段階	『まるごと　日本のことばと文化』
入門	『まるごと　日本のことばと文化』入門　L1-18
初級前期	『まるごと　日本のことばと文化』初級１L1-18
初級後期	『まるごと　日本のことばと文化』初級２L1-18

3.5　テストと評価

次にどのようにテストを実施し、学習を評価したかについて述べる。本研修では上記表５で示した各学習段階の中間時と終了時に、テストを実施し、学習の定着度を測った。実施したテストは『まるごと』「かつどうテスト」、「りかいテスト」及び「漢字テスト」の３種類である。「かつどうテスト」は口頭能力を評価するもので、講師と候補者が１対１のロールプレイを行い、ルーブリックに基づきタスク達成度を評価した。その他「語彙・表現、文法、発音、流暢さ」といった項目もチェックした。

「りかいテスト」は「りかい」で学んだ言語構造（語彙、文法、文型など）や聴解力、読解力を評価した。「漢字テスト」は「りかい」で学習した漢字語彙の読みや表記、意味について問うた。

テストもオンラインで行う必要があるため、Google フォームを使い、問題は全て選択式とした。テスト実施時は候補者が Zoom に入り、そこで講師が Google フォームの URL を共有し、講師も候補者もビデオオンで実施した。テスト実施時は私語や資料閲覧は禁止とした。テスト実施後は個別のフィードバックとともに、クラス全体へのフィードバックも行った。

研修終了時の成績評価はテストのほか、予習として課していた「まるごとコース」各レベルの修了証や作文提出も平常点として加えた。平常点にこれらを加味したのは、「みなと」での予習や作文など課題提出が反転授業にとって欠かせないものだと考えたからである。

4.　反転授業における学習の進め方

4.1　『まるごと』１トピックの流れ

『まるごと』初級２までの授業時間は、「かつどう」は１課あたり90～180分、「りかい」は120～180分が目安とされている。本研修で反転授業のシラバスを組み立てるにあたり、『まるごと』の「かつどう」と「りかい」の授業をどのように時間割に落とし込んでいったか、次に１トピックの流れについて述べる。

『まるごと』は２課で１トピックの構成となっている。本研修では「かつどう」と「りかい」を１課ずつ交互に進め、図２の通り、入門では１トピックの流れの中に「作文」と「まとめ」のコマを入れ、全６コマで１トピック完結とした。「まとめ」ではその課で出てきた文法項目のまとめの他、それまでに学習した文型のフォーム確認や助詞、語彙のまとめなどを行っ

た。そして初級１と初級２では「りかい」で扱う文法の量が多くなることから、「りかい」を１コマ増やし、計７コマで１トピックを終了するようにした（下記図２、初級２の例参照）。１コマ増やした「りかい」では十分に練習できなかった文型の練習やそのトピック内の読解を扱った。『まるごと』の「りかい」には漢字も含まれるが、漢字の学習は別に行った。

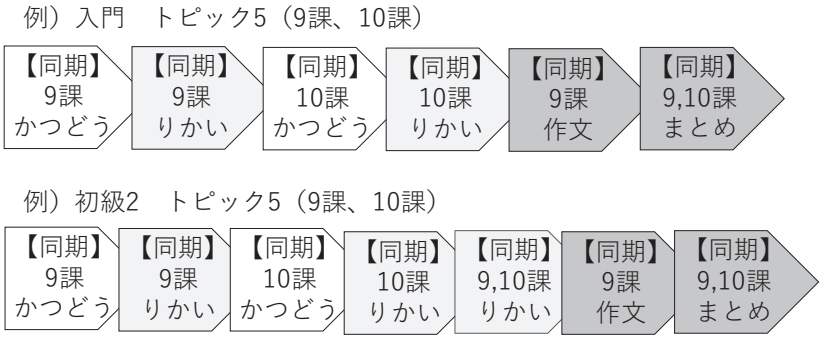

図２　１つのトピックの流れ

4.2 『まるごと』の学習の流れ

図２に示した授業を全て反転授業で行った。同期での授業の他、非同期で候補者はどのように学習を進めたか、学習の流れを次に説明する。

候補者には同期での授業の前に「まるごとコース」の該当課を学習してくることを課した。「まるごとコース」の中に英語や尼語（初級２は英語のみ）の語彙訳や文法説明もあるが、さらに別途各国語訳付きの語彙帳やワークシートなどの副教材を配布した。「まるごとコース」の他これらの副教材や『まるごと』を使用して候補者は予習し、「かつどう」での会話練習や「りかい」での作文など、授業での発表準備も行った。

同期の授業では「クラスメートや講師と一緒に行う活動」を意識し、予習内容の理解や運用の確認、会話練習や発表といったアウトプット活動を中心に行った。授業は講師がプレゼンテーション資料を画面共有しながらの他、チャットやブレイクアウトルームなど Zoom の機能を用いて行われた。

同期の授業後は学習内容確認クイズや事後課題が提示された。事後課題は科目やクラスによるが、「かつどう」のトピックや Can-do に関連した会話をクラスメートと録音、またプレゼンテーションビデオを個人やグループで作成するといった応用課題が課されることもあった。

「まとめ」の授業については、各トピックの文法のまとめとして『まるごと』の内容に沿って作成されている学習支援サイト「まるごと＋（プラス）」の文法問題をしてくること、また事前送付しているシートで文型や活用を予習してくることとした。

以上のように候補者は与えられた教材を用いて非同期で予習や授業準備をしたうえで同期の授業に臨み、同期の授業ではクラスメートや講師と一緒にアウトプット練習や理解確認を行っ

た後、非同期で学習内容の確認や発展活動にチャレンジすることによって定着を促進するという流れであった。

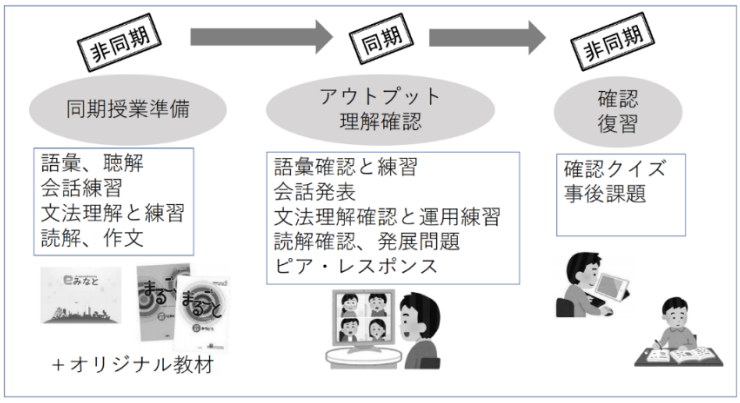

図３　学習の流れ

4.3 『まるごと』以外の「日本語」科目

これまでに述べた以外の主な科目として、「文字（漢字）」と「言語知識」がある。

『まるごと』「りかい」の漢字は「まるごとコース」で予習ができるが、別途漢字練習用シートを作成、事前送付し、「日本での生活や就労時に判別可能な文字が書ける」ように手書き練習を促した。事前課題や同期での授業の進め方、さらに事後課題はクラスやレベルにより様々であるが、同期での授業では主に複雑な字形や意味、使い方の確認、またそれまでに学習した漢字の整理（部首、音）を行い、徐々に自分で漢字学習を進め、漢字数を増やせることも意識した。「漢字プラス」についても同様に進めた。

「言語知識」もオリジナルの学習用シートを作成し、それを用いて、授業では文型使用の確認や口頭練習を中心に行った。

4.4　オンライン研修における「自律学習」

オンライン研修における反転授業を促すために重要なポイントは候補者の自律学習促進である。本研修では、候補者の自律学習の時間は大きく２つに分かれ、１つは自分で学習を進めるクラス外での自律学習の時間、もう１つは毎日１コマ設定されているクラスでの自律学習時間である。

訪日前研修における自律学習の大きな目標は、まず学習する習慣を身につけること、そして学習を計画し、ふり返ることができるようになることである。この目標のために「学習の計画とふり返りシート」を活用する、候補者間で学習方法をシェアする、また講師との個別面談を行うなどこれまでの研修でも行われていたことは、本研修でもオンラインで実施した。異なるのは、これまでは１日中対面での授業が行われ、授業後も寮に同室者がいて、いつでも質問で

きる環境であったのが、オンライン研修では１日３コマの同期授業以外、候補者は一人で学習を進めなければならない環境にあるということである。そのため、オンライン研修におけるクラスでの自律学習の時間は、Zoom 内で各自、或いはグループで学習を行うことを通じ、他の候補者の学習の様子を観察したり、学習内容について他の候補者と質問し合ったりできる貴重な時間である。候補者がこの時間をうまく活用できるように開講時やクラス替え時にはお互いが知り合える活動を行うなど、クラスコミュニティを作る働きかけを行った。さらにオンライン研修では各候補者の学習やその他抱える困難な点が把握しにくいため、必要に応じ個別面談を丁寧に行うようにした。また、これまでは研修開講時に配布するファイルに紙のシートや成果物を綴じてポートフォリオを作成していたが、本研修では e ポートフォリオとし、クラウド上に作成されたフォルダに「学習の計画とふり返りシート」などのシートや各自の学習成果のデータを保存するようにした。

5. アンケート調査から見る新たな訪日前研修

5.1　調査の目的と方法

オンラインによる訪日前研修は無事に閉講の日を迎えることができたが、新たな取り組みは候補者に受け入れられたのか、反転授業をはじめとする研修デザインは学習をサポートできたのか。その実態を探り、良かった点や改善すべき点を見出すため、アンケート調査を行った。アンケートは Google フォームで作成し研修終盤に両国で実施した。

5.2　調査の結果

尼から268名、比から203名の回答を得た。回答率はそれぞれ、99.3％、94.9％であった。まず、研修全体への満足度については「非常に満足」「まあ満足」と答えた割合が尼では88.7％、比では99.5％と高かった。次に反転授業について聞いたところ、両国とも95％以上が「よかった」「まあまあよかった」と答えた。

次に、「研修で良かった点」「研修で悪かった点」について、それぞれに共通する10の選択肢の回答を国別に比較する。回答は複数回答可とした。

「研修で良かった点」を見ると、両国で「みなと」のほか、Quizlet などの学習ツールに対する評価が高い。実際に自律学習の時間に、個人やグループでオンライン用教材に取り組んでいる様子が見られた。教材を多数提供したことで飽きずに学習できたようだ。

また、「研修で悪かった点」では、尼の44.3％が「Zoom でのオンラインレッスン」と答えている一方で、比の同回答は10.8％に留まっており、むしろ「研修で良かった点」として80.3％の回答を得ていることは興味深い。

アンケートには「授業を受けているとき、インターネットの問題はあったか」という質問も

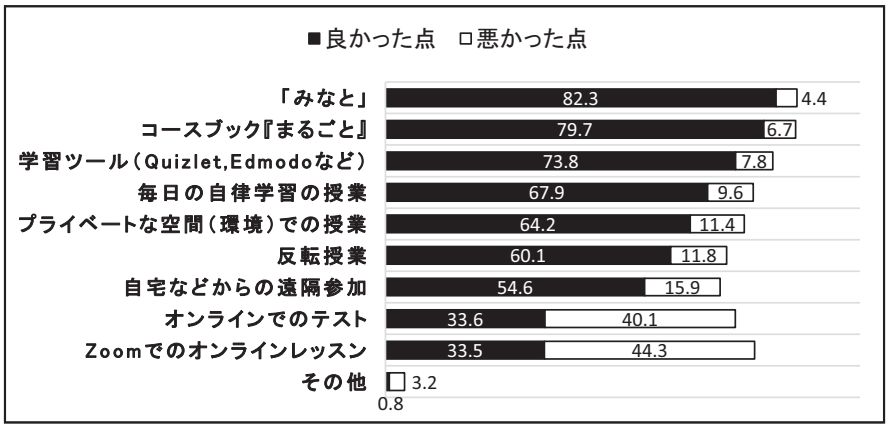

図４　研修で良かった点・悪かった点（尼）

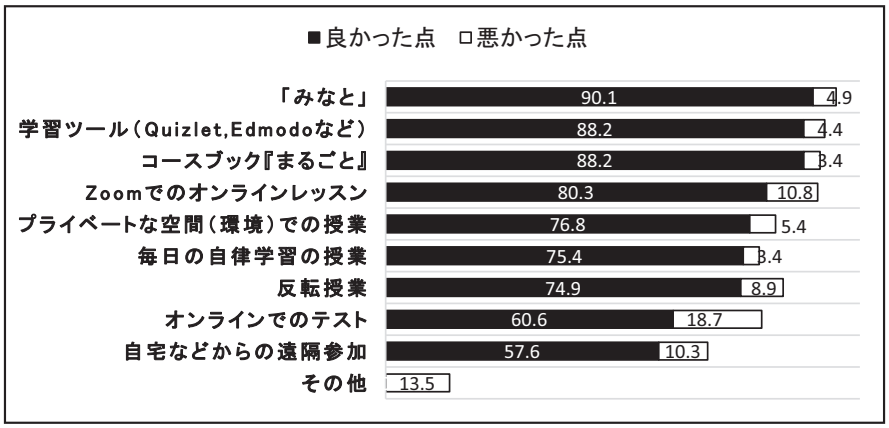

図５　研修で良かった点・悪かった点（比）

あり、それに対して「非常に問題があった」「時々問題があった」と答えたのは尼が91.4％、比が64.1％で、両国のインターネット環境には差があることがわかった。インターネット環境が万全とはいえなくても、反転授業を取り入れた研修デザインは候補者に好意的に受け入れられたようだ。コロナ禍の不自由な環境にあっても訪日を目標に学習に励もうとする意欲は集合研修と変わらないことが示された。

6. オンライン研修の成果と課題

コロナ禍により実施形態や主教材変更を余儀なくされた研修であったが、両国とも研修終了時に９割以上の候補者が目標である初級後期修了レベルに到達することができた。また、両国とも約９割の候補者から「満足」という回答を得る研修を実施することができた。一方で両国のインターネット環境の違いなど、今後個別に検討すべき課題も見えた。また今回は候補者へのアンケート調査のみであったが、インターネット環境や自習時間の使い方と成績との相関性など、学習成果に与える要因についての分析、さらに訪日後研修へのスムーズな橋渡しの点か

らの研修デザインの評価も今後の課題としたい。

今後コロナ禍が収まり、以前のような集合研修が可能になるかもしれないが、本研修で試みた反転授業、またそれを可能にするためのオンライン学習ツールの使用は、候補者の自主性や自律学習を促すものとして研修に取り入れていく価値があると言えるであろう。本研修での経験を今後の研修デザインに活かしていきたい。

謝辞　訪日前研修の実施にあたり、国際交流基金関西国際センターより副教材や「みなと」運用面などでご協力いただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

〔注〕

(1)『反転授業』（バーグマン他 2014）を参考とし、本稿では学習者が講義の部分をオンライン上での学習リソースや動画などで事前に学習し、授業ではアウトプット活動を中心に行う授業形態とした。

(2) 図１作成にあたっては下記を参考とした。
国際交流基金「EPA（経済連携協定）日本語予備教育事業―事業概要―」
＜https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/education/training/epa/about.html＞（2021年８月６日）

(3) ６か月間の訪日前研修の授業を担当する日本語講師であり、例年、研修開始前に募集が行われる。

〔参考文献〕

厚生労働省（2019）「経済連携協定（EPA）に基づく外国人看護師・介護福祉士候補者の受入れ概要」
＜https://www.mhlw.go.jp/content/000639886.pdf＞（2021年８月６日）

登里民子・山本晃彦・鈴木恵理・森美紀・齊藤智子・松島幸男・青沼国夫・飯澤展明（2014）「経済連携協定（EPA）に基づくインドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者を対象とする日本語予備教育事業の成果と展望」『国際交流基金日本語教育紀要』10、55-69

バーグマン, J.・サムズ, A.（2014）『反転授業』（上原裕美子訳）オデッセイコミュニケーションズ